

願いを込めるお祭り

岡ちゃん

ひな祭りは、女の子の健やかな成長を願うお祭りです。旧暦の3月3日頃に桃の花が咲くことや、桃は魔除けの効果があると信じられていたことで"桃の節句"とも呼ばれています。雛人形の側に飾られた可愛らしい桃の花をみると、心が和みます。昔は紙で雛人形を作って、病氣やけがなどのよくないものを持っていってもらうように、川に流す"流し雛"をしていたそうです。その時代に生きる人たちの子供を大切に思う気持ちが伝わります。ひなあられを食べる事にも意味があるそうです。「ピンクは生命」「白は雪の大地」「緑は木々の芽吹き」という捉え方もあるそうです。この3色のひなあられを食べることで、自然のエネルギーを得て、元気で丈夫に育つとされています。この意味を知ってから、ひなあられには何か生命が宿っているような貴重な食べ物に思えます。雛祭りには、代々続けられてきたお祭りの1つとして、子供の成長を願う人々の願いが込められていると感じました。

人は人とわかちあい、協力して生きることで幸せを感じられると思っています。子供たちが元気に育つように、改めて雛人形に願いを込めたいと思います。



Photo by 風ちゃん

本「春の香り」について

ニャンコ先生

社団がん哲学外来の2月のzoomセミナーの講師は愛知県の坂野貴宏さんでした。セミナーの内容は坂野貴宏さんの次女春香さんが2013年小学6年の秋6cmの脳腫瘍が見つかり、手術で切除したこと、6年後再発し、2度目の手術、翌年再々発で、その時は治療法なしで2020年12月にお亡くなりになったことです。

小児がん(14歳以下)は1年間2000人強の方が罹患し、4歳以上では白血病、脳腫瘍が多いそうです。坂野家は貴宏さん、妻の和歌子さん、長女の京香さん次女の春香さんの4人家族で貴宏さんは中高一貫校の社会の先生、またご自分もプレーし、好きなハンドボールの部を作り、指導はじめ顧問として休日もない時もある状態だったそうです。

7年間の春香さんの闘病生活での忘れられないことの一つに、再発がわかった時、医師より、手術の方法として、1、腫瘍全部を切除する、が後遺症として右半身麻痺になるかもしれない、2、後遺症の少ないよう切除するが、腫瘍が残るかもしれない、の2方法の選択を春香さんに聞いたそうです。

春香さんは即、生きたい、だから1、でお願いしますと、そして貴宏さんに様々なことがあるだろう、これからを忘れないように記録して欲しいと言われ、以後日記のように記録したそうです。春香さんは絵を書くことが大好きだったそうで、将来は絵を書く仕事例えば漫画家のようになりたいと言っていたそうです。手術後は予想通り右手で絵を書くことができず、左手で書く練習をし、その作品が絵本「Xくん」(ぱつくと読む)です。和歌子さんは春香さんが亡くなった後数か月後に、春香さんの再発後言っていた、人の心に何かを刻みたい、人の役に立ちたいから、春香さんと家族との、すべて、何を感じ、どう受け止め、考え、行動したかを思い出し記録することにしたそうです。貴宏さんと和歌子さんの記録が本「春の香り」です。

また、「春の香り」は映画化され、東京では3月14日よりアップリンク吉祥寺、イオンシネマ板橋で上映予定です。



岡倉天心記念がん哲学外来・巣鴨カフェ「桜」

ugamocafe.sakura@gmail.com

<https://sugamo-sakura.com/>

後援：一般社団法人がん哲学外来
がん哲学外来市民学会

代表 西原光治
編集 浦川 慶子